

RXデータ通信コマンド詳細

コマンドデリミタ: コマンド及び、データの最後に付加することで1パケットの終了マークとします。

CR(0DH)を受信することでコマンドの解析を始めます。

LF(0AH)は CPU⇄PC 間では必要ありません。

(プリンター出力時必要)

データ区切り文字

SP(20H) : 1パケットにデータが複数個ある場合、データ間の区切りとして使用します。

エラーコマンドに対して

PC 側から下記に相当しないコマンド(データ)、もしくは解析不能のデータが送信されて来た場合。

N G R L を出力。

STX(02H) : CPU 受信バッファクリア

バイナリ値の 02H を受け取ることで CPU 側の受信バッファをクリアします。

出力フォーマット(PC→CPU)

02

入力フォーマット(CPU→PC)

なし

RDVR : CPU プログラムバージョン No. 読み出し

CPU プログラムの開発バージョン No.を“メジャー”-“マイナー”-“リビジョン”の形式で出力。

出力フォーマット(PC→CPU)

R D V R R L

入力フォーマット(CPU→PC)

R X 0 0 0 0 0 0 0 0 R L

RDMDL: 許容過負荷 読み出し

現在接続されている CPU ゲージの許容過負荷を出力。(何 Kg のゲージか)

出力フォーマット(PC→CPU)

R D M D L R L

入力フォーマット(CPU→PC)

SF 5 0 . 0 0 SF k g R L (50Kg の場合)

RDF0: 追従表示値 読み出し

LCD 表示用に使用されているデータを出力。

* 0 は数値のゼロです。

出力フォーマット(PC→CPU)

R D F 0 R L

入力フォーマット(CPU→PC)

SF + 1 0 0 . 0 0 SF k g R L (100Kg の場合)

RDF1: 追従瞬間値 読み出し

データ処理する前段階での A/D コンバータからの直値に近いデータを出力。

出力フォーマット(PC→CPU)

R D F 1 **CR LF**

入力フォーマット(CPU→PC)

SP **+** **5** **.** **0** **0** **0** **0** **SP** **k** **g** **CR LF** (5Kg の場合)

RDF2: 引張最大値 読み出し

引張側、サンプル最大値を出力。

出力フォーマット(PC→CPU)

R D F 2 **CR LF**

入力フォーマット(CPU→PC)

SP **+** **1** **0** **.** **0** **0** **0** **0** **SP** **k** **g** **CR LF** (10Kg の場合)

*ピーク設定になっておらず、
このコマンドを受け付けた場合、該当データ無しで、

N O **CR LF** を出力。

RDF3: 圧縮最大値 読み出し

圧縮側、サンプル最大値を出力。

出力フォーマット(PC→CPU)

R D F 3 **CR LF**

入力フォーマット(CPU→PC)

SP **+** **2** **0** **.** **0** **0** **0** **0** **SP** **k** **g** **CR LF** (20Kg の場合)

*ピーク設定になっておらず、
このコマンドを受け付けた場合、該当データ無しで、

N O **CR LF** を出力。

RDF1R0~RDF1E

A/D コンバータコンバート直値 データ連続読み出し

高速通信を行うために RX シリーズ独自の機能。

RDF1R0: 設定値読み出し(未実装)

RDF1R1: データ出力開始

RX ゲージ AD コンバータの直値を ASCII コード、16 進データ 4 桁にて出力します。

0000(30H x4) ~ FFFF(46H x4)

RDF1RE: データ出力停止

RDFD1:追従瞬間荷重変位値 読み出し

デジマチック接続時の変位データが追加されたデータの読み出し。

(ミットヨノギス等)

出力フォーマット(PC→CPU)

R D F D 1 CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

SP + 2 . 0 0 0 SP k g SP + 1 . 0 0 SP m m CR LF

(荷重:2Kg、変位:1mmの場合)

RDTKF1:メモリ追従値 一括読み出し

CPU メモリ内にバッファされている追従表示値を一括で出力。

出力フォーマット(PC→CPU)

R D T K F 1 CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

(バッファ数199)

SP SP SP 1 SP + 2 . 0 0 0 SP k g SP G CR LF (荷重:2Kg、判定:Good の場合)

SP SP SP 2 SP + 9 . 0 0 0 SP k g SP H CR LF (荷重:9Kg、判定:High の場合)

|

SP 1 9 8 SP = 9 . 0 0 0 SP k g SP L CR LF (荷重:-9Kg、判定:Low の場合)

SP 1 9 9 SP + 2 . 0 0 0 SP k g SP G CR LF (荷重:2Kg、判定:Good の場合)

*メモリバッファ内のデータが無い場合、また、ピーク設定になっていて、
このコマンドを受け付けた場合、該当データ無しで、

N O CR LF を出力。

判定について

バッファデータの後にコンパレータ設定に従った判定結果を付加。

判定結果がコンパレータ範囲内にあった場合 :Goodで SP G を付加。

判定結果がコンパレータ範囲以上にあった場合 :Highで SP H を付加。

判定結果がコンパレータ範囲以下にあった場合 :Lowで SP L を付加。

コンパレータ判定機能を使用していない場合 :未使用で SP SP を付加。

RDTKF2:メモリ引張最大値 一括読み出し

CPU メモリ内にバッファされている引張最大値を一括で出力。

出力フォーマット(PC→CPU)

R D T K F 2 CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

RDTKF1と同等です。

*メモリバッファ内のデータが無い場合、また、トラック設定になっていて、このコマンドを受け付けた場合、該当データ無しで、

N O CR LF を出力。

RDTKF3:メモリ圧縮最大値 一括読み出し

CPU メモリ内にバッファされている圧縮最大値を一括で出力。

出力フォーマット(PC→CPU)

R D T K F 3 CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

RDTKF2と同等です。

RDTKF4:メモリバッファ 一括読み出し

メモリ内容を問わずメモリバッファ内にデータがある場合、一括で出力。

出力フォーマット(PC→CPU)

R D T K F 4 CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

RDTKF1と同等です。

*メモリバッファ内のデータが無く、このコマンドを受け付けた場合、該当データ無しで、

N O CR LF を出力。

WRFZ:荷重ゼロ、ピークリセット

追従値をゼロにし、バッファされているピーク値をクリア。

出力フォーマット(PC→CPU)

W R F Z CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

O K CR LF

*コマンド受付、コマンド内容を処理後左記のコマンドを送信。

WRUNGK:計測単位 kg選択

計測単位をコマンド受付後からkgに変更。

出力フォーマット(PC→CPU)

W R U N K G CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

O K CR LF

*コマンド受付、コマンド内容を処理後左記のコマンドを送信。

WRUNN:計測単位 N 選択

計測単位をコマンド受付後から N に変更。

出力フォーマット(PC→CPU)

W R U N N CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

O K CR LF

* コマンド受付、コマンド内容を処理後左記のコマンドを送信。

WRUNLB:計測単位 LB 選択

計測単位をコマンド受付後から LB に変更。

出力フォーマット(PC→CPU)

W R U N L B CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

O K CR LF

* コマンド受付、コマンド内容を処理後左記のコマンドを送信。

WRPZ:ピークリセット

バッファされているピーク値をクリア。

出力フォーマット(PC→CPU)

W R P Z CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

O K CR LF

* コマンド受付、コマンド内容を処理後左記のコマンドを送信。

WRST:スタンド停止指令

スタンドコントロールがあり、スタンドが稼動中である場合、スタンドを停止。

出力フォーマット(PC→CPU)

W R S T CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

O K CR LF

* コマンド受付、コマンド内容を処理後左記のコマンドを送信。

* スタンドコントロールが無く、このコマンドを受け付けた場合。

N O CR LF

を出力。

WRUP:スタンド上昇指令

スタンドコントロールがあり、スタンドが稼動可能である場合、スタンドを上昇。

出力フォーマット(PC→CPU)

W R U P CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

O K CR LF

* コマンド受付、コマンド内容を処理後左記のコマンドを送信。

* スタンドコントロールが無く、このコマンドを受け付けた場合。

N O CR LF

を出力。

WRDO:スタンド下降指令

スタンドコントロールがあり、スタンドが稼動可能である場合、スタンドを下降。

*O はアルファベットのオーです。

出力フォーマット(PC→CPU)

W R D O CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

O K CR LF

* コマンド受付、コマンド内容を処理後左記のコマンドを送信。

* スタンドコントロールが無く、このコマンドを受け付けた場合。

N O CR LF

を出力。

RDYS1:コンパレータ設定値セット1 読み出し

コンパレータ設定セット1の設定値を出力。

出力フォーマット(PC→CPU)

R D Y S 1 CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

SP + 2 0 . 0 0 SP k g CR LF (+20Kg の場合)

* コンパレータ判定機能を使用していない場合。

N O CR LF

を出力。

RDYS2:コンパレータ設定値セット2 読み出し

コンパレータ設定セット2の設定値を出力。

出力フォーマット(PC→CPU)

R D Y S 2 CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

RDYS1と同等です。

RDYS3:スタンド制御用設定値セット1 読み出し

スタンド制御用設定値セット1の設定値を出力。

出力フォーマット(PC→CPU)

R D Y S 3 CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)

SP + 2 0 . 0 0 SP k g CR LF (+20Kg の場合)

* スタンド制御機能を使用していない場合。

N O CR LF

RDYS4:スタンド制御用設定値セット2 読み出し
スタンド制御用設定値セット2の設定値を出力。
出力フォーマット(PC→CPU)

R D Y S 4 CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)
RDYS3と同等です。

RDMD:モードチェックコマンド
PEAK モードか TRACK モードかの確認コマンド
出力フォーマット(PC→CPU)

R D M D CR LF

入力フォーマット(CPU→PC)
PEAK モードの場合。

P E A K CR LF

TRACK モードの場合。

T R A C K CR LF

>通信設定

ボーレート:38400bps
データビット:8ビット
パリティ:無し
ストップビット:1ビット

- * RX ゲージ本体の通信設定(12. PC)を必ず“PC”にしておいてください。
注意)項目名が“PC”ですので、設定と勘違いしやすいので注意が必要です。
確実に設定が“PC”になっているか取扱説明書をよく読んでご確認ください。